【勤務参考】51　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　１５．１０．２２

技術開発官（船舶）

「Ｊｏｉｎｔ　Ｖｉｓｉｏｎ　２０１０」の読み方

米国の「Ｊｏｉｎｔ　Ｖｉｓｉｏｎ　２０１０（以下ＪＶ２０１０と言う）」が公表されていることは周知であり、その内容が、主として将来の統合運用面から要求されるところの科学技術に関する米国各軍における研究開発の策定基盤となる構想であることも承知していると思う。

このＪＶ２０１０は、将来予測される広大な戦域での戦闘、近代兵器の拡散防止及び大量破壊兵器の脅威に対する防御のために、先進技術の発展を期しているが、特に情報の進歩発展が統合化された戦力について更に高いレベルに引き上げることを可能にするという前提が設定されて構築されているというのも多くの人が認めている。

軍事能力の強大化、効率化のために、宇宙をベースとした情報システムと敵の行動、部隊規模、装備器材、資材を探知・探索できる能力向上や、敵シグネチュアーの探知、友軍のシグネチュアーの防護・低減に関する研究などに力点が置かれている。

このことは、規模とスピードこそ異なるが、我が国が指向しようとしている方向とは一致している。したがってあらゆる機会を活用して唯一無二の同盟軍である米国軍の進化の方向に関する重要な情報として注意・注目しておく必要がある。

しかし、ここで忘れてならないことが一つある。上田元海将補の言を借りれば次の通りである。

「技術の目的は、男女の兵士が装備し、生命の危険に晒されながら、それを使用するのだということを忘れてはならない。単に優れた技術の装備品を兵士に与えさえすれば、それが戦闘に役立つといった考えは正しいとは言えず、むしろ誤りである。兵士と指揮官は全作戦の心臓部であり、技術と装備品は彼らの任務達成の手助けをするだけである。」

まさにそのとおりであって、我々技術屋が陥りやすい「科学技術絶対視観」を戒める言として重く受け止めるべきであろう。

すなわち、ＪＶ２０１０は、先に述べたとおり将来必要な科学技術に力点を置いたヴィジョンであるが、米国はその背景に古くから培われたヒューマニズムや戦闘理念が、数多くの経験から浸透しているということを看過して読まなければならないという側面があるのである。

そこでその点についてついでに、もう一言借用する。

「将来ＲＭＡ（Revolution in Military Affairs：軍事革命）が発展し、Ｃ４Ｉによる指揮統制においてＳＥＮＳＯＲ　ＴＯ　ＳＨＯＯＴＥＲが成り立つ装備を与えたとしても戦闘に成功するとは限らないことを述べている。

指揮官、特にそれ以上委任を可としない戦術指揮官が適時に意志を決定し、即時効果のある攻撃をできるとは限らないことを述べている。いかに技術が高度化しても完全なＭＡＣ

ＨＩＮＥ－ＭＡＣＨＩＮＥのＷＥＡＰＯＮ　ＳＹＳＴＥＭはないと主張もしている。真のＭＡＮ－ＭＡＣＨＩＮＥ　ＳＹＳＴＥＭを為すのは人であり、その人の教育の大切さを忘れてはならないのである。」

　これもそのとおりであって、日頃「用兵者との連携」「死生観の醸成」などを口にしているのはひとえにこのことなのである。

　我々が「艦艇創成」を生業としていることを標榜する以上、そこにいるであろう乗員の存在を決して無視してはならないと考える。

　したがって以上の視点から米国のＪＶ２０１０を読んで、米国の強さをあらためて感じてもらいたい。そしてそのことを再度念頭において、我が国の「良い艦艇」を創る努力をすることを願うものである。

以上